

反田恭平さん応援レポート

反田恭平 ピアノ・リサイタル2017

全国縦断ツアー

2017年7月28日(金)
富山県教育文化会館

全国13都市での縦断ツアー

7月8日(土)を皮切りにスタートした反田恭平さんのリサイタル・ツアー「反田恭平 ピアノ・リサイタル2017 全国縦断ツアー」。

全国13か所にて開催される予定で、これまでに川崎、静岡、名古屋、長岡と続き、この日の富山公演が5公演目。

2か月にわたり展開されるツアーには、2種類のプログラムが用意されている。ショパンのエチュードを軸にしたプログラムⅠと、リストのソナタを軸にしたプログラムⅡ。この日の富山公演ではプログラムⅠが予定されている。

会場の富山教育文化会館に向かうと、すでに多くのお客様。開場時間とともに場内に人が溢れる。

「…(富山に)いつまた来てくれるか、わからないから、絶対来なくちゃと思って…」との会話が聞こえてくる。チケットは早くに完売。満員の会場に着席した。

KNB プレミア
the LIVE

KYOHEI
SORITA

Piano
Recital
2017

反田恭平
ピアノ・リサイタル2017 全国縦断ツアー

富山県教育文化会館
前席指定 前売 ¥3,500(税込) 当日 ¥4,000(税込)

2017
7/28
金

開場 18:30
開演 19:00

主催:全日本放送
共催:イーアラス/日本コロムビア
後援:富山県/北日本新聞社
制作協力:日本コロムビア

チケットぴあ
ローソンチケット

お問い合わせ 北日本放送事務局 TEL 076-432-5555(代) 平日 10:00~17:00



<全国ツアー日程>

- 7月8日(土) @ミューザ川崎シンフォニーホール
- 7月13日(木) @静岡音楽館
- 7月15日(土) @愛知県芸術劇場コンサートホール
- 7月21日(金) @長岡リリックホール コンサートホール
- 7月28日(金) @富山県教育文化会館
- 8月3日(木) @札幌市コンサートホールKitara
- 8月4日(金) @函館市芸術ホール
- 8月6日(日) @福岡シンフォニーホール(アクロス福岡)
- 8月17日(木) @岩手県民会館中ホール
- 8月20日(日) @福島市音楽堂
- 8月26日(土) @兵庫県立芸術文化センターKOBELCO大ホール
- 8月31日(木) @秋田アトリオン音楽ホール
- 9月1日(金) @東京オペラシティ コンサートホール

集中力。パワフルに、繊細に、思い切りよく駆け抜ける



反田さんが登場。

やや低めにセットされた椅子。ストレッチのように指をほぐし、ずっと弾き始める。

最初の曲はスクリャービンの幻想曲。モスクワ音楽院で研鑽を積んできた反田さん、ロシアに行き、初めて取り組んだ作品が、この曲だったそうだ。ダイナミックな音を響かせ、会場の皆様をぐっと惹きつける。

2曲目はドビュッシー「喜びの島」。色彩豊かな曲を軽やかにきらきらと。続いてはドビュッシーの「月の光」。曲と寄り添うような美しく優しい音色に情景が浮かぶ。

一転して軽快なリズムで始まったのは、シューマンの「ウィーンの謝肉祭の道化」。ジムで筋力トレーニングを欠かさないとという反田さん。筋力によるものなのか、手指も強靱そうだ。たっぷりの強音の力強さと弱音の繊細さ、リズムの緩急の表現が、無理なく自然体で美しい。弾きながら口を動かしている。曲と語り合っているのか、口ずさんでいるのか。柔らかい表情は、なんだか幸せそうに見え、こちらも幸せな気分で聴き入る。ラストの楽章を華やかに弾き終えて前半終了。熱い拍手が何度も贈られていた。



後半はショパンの4つのマズルカOp.17でスタート。第10番、11番、12番、13番の4曲を流れるように弾いていく。ポーランドの民族舞曲がベースのマズルカを、しなやかに、楽しそうに演奏する。

そして最後はショパン「12のエチュード(練習曲)Op.10」。3番「別れの曲」、5番「黒鍵のエチュード」、12番「革命のエチュード」など、よく知られた曲も含め、全12曲を一気に弾いていく。

凄まじい集中力。音楽に対する自身の姿勢や想いを凝縮し、迷いなく音で表しているかのよう。パワフルに、かつ抒情的に駆け抜けていく。

ラストの「革命」を大迫力で弾き終えると、客席の皆様からは大きな拍手とブラヴォーの声。何度も繰り返されるカーテンコールに応えるたたずまいも個性的。



アンコールにはリストの「水の上を歩くパオラの聖フランチェスコ」。鳴りやまぬ拍手にもう1曲。反田さんのアンコール定番となりつつあるシューマン/リスト「献呈」も弾いてくれた。

圧巻の演奏に満席の会場の皆様も大満足のご様子。熱気と興奮が会場を包んだ。

終演後のサイン会は長蛇の列。多くの方々がサインのあとも最後まで残り、サイン会を終えて楽屋へ戻る反田さんを温かい拍手で見送ってくださっていた。



演奏中の写真： ©青柳聡氏

(演奏中、舞台上の写真は全てツアー初日、ミュージア川崎での公演時のもの)

会場写真は財団事務局撮影

「会場ならではのライブ感を味わっていただけたら」

終演後、反田さんに話を聞いた。

— 充実のプログラム；

「…ツアーのプログラムを考えるにあたり試みた曲目リクエストが一番多かったのがショパンのエチュードでした。絵画的で素晴らしい作品ですので、この曲を今回のツアーで繰り返すことは、自分の、ある種飛躍のためにもプラスだと思い、組んでみました」

「…最初の曲は、ロシアに住んでいたのがロシアの曲から始めようと。…『喜びの島』は、『のだめ』で知って。リサイタルで弾いてみたいと思っていたので入れてみました」

人気作品『のだめカンタービレ(二ノ宮知子氏作)』の大ファンである反田さん、実家にはもちろん全巻揃っているそうだ。

— 各会場、多くの方がご来場。どんな演奏をしよう？

「…聴いてくださる方々が自分の演奏をどう捉えてくださっているのか、自分ではよくわからないのですが…でも、もし自分が聴く立場だったら、ミスタッチが全くなくて、すごくきれいな演奏で、というのも凄いと思うけれど、何かライブ感というか、そういうものがあるのがいいかなと思っています」「…演奏している際も、時間というものは動いています。たぶんCDだと、その感覚が少し違うと思うんです。オーディオで聴く場合と会場で聴く場合の違いというか、空気感とか、その時の温度、湿度、様々なものを感じながらライブ感を味わっていただければ…」

筆者の後ろの座席で聴いていらしたご夫婦が、まさに、『CDもいいけどライブはまた全然違うね。本当にライブだね。来てよかったね』と話されていたことを伝えると、ぱっと、うれしそうなお笑顔。



ピアノに打ち込んだきっかけは11歳のときの指揮体験。オーケストラを振る機会を得、非常に感動を覚えたそうだ。「指揮者になりたい」と先生に伝えたら、「まずは楽器を弾けること。ピアノをちゃんとやりなさい」とアドバイスをいただいたことが今につながっている。

「…そういうこともあって、今、ピアノコンチェルトを書き始めています。『指揮者になりたい』と思いながらピアノを弾いている人達を想定した、ピアニストのための『弾き振り(ピアノを弾きながら指揮も振る)』のコンチェルトです。…意外に思われるかもしれませんが、自分の作風は古典派です(笑)」

2年先、2年半先…、と予定が詰まる反田さん。これだけ多忙でも、どんどんアイデアが生まれ、またそれを実行に移すべく、どんどん挑んでいるようだ。少し前には、同年代の音楽家仲間との新しいユニット(“MLMダブル・カルテット”)の立ち上げが発表された。「…ありがたいことに今、いろいろな機会をいただいています。そうした機会を得た経験を活かし、仲間との活動も始めます。小さな子供達や同年代のみんなに“音楽を愛する”という事を共感していただけたらいいなと思っています」…次々と楽しそうに語ってくれた。



もともと、いろんなジャンルの音楽が好きという反田さん。クラシックという枠にこだわっていないというか、そもそもくっついていないというか…。その演奏や話からも印象強い、のびのびとした自由でナチュラルな感性で、どんどん駆け抜けていくのであろう。

ツアーもまだまだ続く。暑い夏場、体調維持にも気を遣うことだろう。

反田さん、ラストまで素敵な演奏を！



本人写真は終演後のサイン会時
上はツアー共通の特製プログラム

<演奏会概要>

◆プログラム

<ツアー・プログラム I >

スクリャービン: 幻想曲 Op.28

ドビュッシー: 喜びの島

ドビュッシー: ベルガマスク組曲 第3曲「月の光」

シューマン: ウィーンの謝肉祭の道化 Op.26

ショパン: 4つのマズルカ Op.17

ショパン: 12の練習曲 Op.10

◆アンコール

リスト: 「水の上を歩くパオラの聖フランチェスコ」

シューマン/リスト: 「献呈」

【コンサート・プログラム】



<p>プログラムI</p> <p>A. スクリャービン: 幻想曲 短調 Op.28 A. Scriabin Fantaisie h-moll Op.28</p> <p>C. ドビュッシー: 喜びの鳥 C. Debussy L'Isle Joyeuse</p> <p>C. ドビュッシー: ベルガマスク組曲より 第3曲「月の光」 C. Debussy Suite Bergamasque No.3 Clair de Lune</p> <p>R. シューマン: ウィーンの雑肉祭の道化 Op.26 R. Schumann Faschingsschwank aus Wien Op.26</p> <p>第1曲 アレグロ 変ロ長調 No.1 Allegro Op.26 第2曲 ロマンティック 変ロ長調 No.2 Romanze Op.26 第3曲 スケルツィーノ 変ロ長調 No.3 Scherzino Op.26 第4曲 間奏曲 変ロ長調 No.4 Intermezzo Op.26 第5曲 フィナーレ 変ロ長調 No.5 Finale Op.26</p> <p>休憩</p>	<p>F. ショパン: 4つのマズルカ Op.17 F. Chopin 4 Mazurkas Op.17</p> <p>第10番 変ロ長調 作品17-1 No.10 B dur Op.17-1</p> <p>第11番 変ロ長調 作品17-2 No.11 A dur Op.17-2</p> <p>第12番 変ロ長調 作品17-3 No.12 B dur Op.17-3</p> <p>第13番 イ短調 作品17-4 No.13 a-moll Op.17-4</p> <p>F. ショパン: 12の練習曲 op.10 F. Chopin 12 Etudes Op.10</p> <p>第1曲 ハ長調 Op.10-1 No.1 C dur Op.10-1</p> <p>第2曲 イ短調 Op.10-2 No.2 A-moll Op.10-2</p> <p>第3曲 ホ長調 Op.10-3 No.3 E dur Op.10-3</p> <p>第4曲 嬰ハ短調 Op.10-4 No.4 e-moll Op.10-4</p> <p>第5曲 変ロ長調 Op.10-5 No.5 B dur Op.10-5</p> <p>第6曲 変ロ長調 Op.10-6 No.6 B dur Op.10-6</p> <p>第7曲 ハ長調 Op.10-7 No.7 C dur Op.10-7</p> <p>第8曲 ヘ長調 Op.10-8 No.8 F dur Op.10-8</p> <p>第9曲 短調 Op.10-9 No.9 F-moll Op.10-9</p> <p>第10曲 変ロ長調 Op.10-10 No.10 B dur Op.10-10</p> <p>第11曲 変ロ長調 Op.10-11 No.11 B dur Op.10-11</p> <p>第12曲 ハ短調 Op.10-12 No.12 c-moll Op.10-12</p>	<p>プログラムII「東京・札幌公演」</p> <p>武満徹: 遅れない休息 Tera Takemitsu Unaccompanied Rest</p> <p>I 「ゆっくりと、美しくお入りください」 I Slowly and with a great atmosphere</p> <p>II 「静かに内閣を響りて」 II Quietly and with a great atmosphere</p> <p>III 「愛の歌」 III Song of Love</p> <p>F. シューベルト: 4つの即興曲 D.899/op.90 F. Schubert 4 Impromptus D.899 Op.90</p> <p>第1曲 Allegro molto moderato</p> <p>第2曲 Allegro</p> <p>第3曲 Andante</p> <p>第4曲 Allegretto</p> <p>休憩</p> <p>M. ラヴェル: 亡き王女のためのパヴァーヌ M. Ravel Pavane pour une infante défunte</p> <p>F. リスト: ピアノ・ソナタ 短調 S.178 F. Liszt Sonata für Klavier h-moll S.178</p>
--	---	--

プログラムI

1

A. Scriabin : 幻想曲 op.28

A.Scriabin Fantaisie h-moll Op.28

曲目・解説: 反田恭平

A. スクリャービン: 幻想曲 短調 Op.28
A.Scriabin Fantaisie h-moll Op.28

ロシアに行き、初めて取り組んだ作品がこの幻想曲。師のM.Vokresenskyは、スクリャービンについてほとんど詳しく、この曲に際しても多量かつ熱く語った。幸いにもロシア滞りて書いたコンサート会場は、スクリャービン本人が晩年まで来た家(今では博物館になっている)であった事はとても思い出深い。

そして今回、皆さんからの曲目リクエストで2016の夏を満喫し、また満ちていただくチャンスを得たのは深謝、本当に嬉しい。

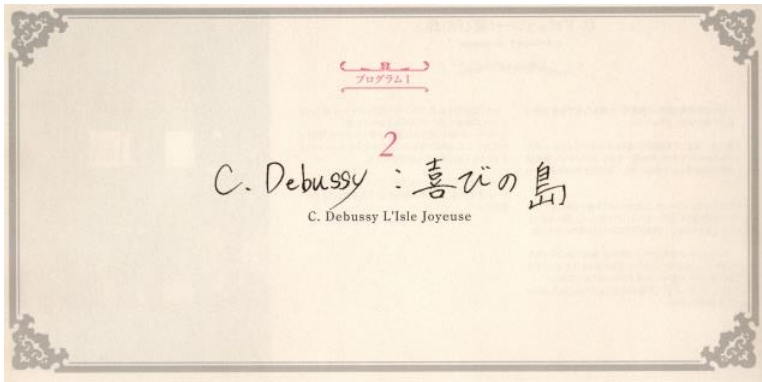
スクリャービンの初期というと、ショパンを思い出す方も少なくはないはず。実際、彼はショパンを心底尊敬しており、後に24の練習曲作品11、12の練習曲 作品8、そしてワルツやマズルカ、ノクターン、スケルツェ等を作曲し、後述に述べている。

この幻想曲作品28は、ソナタ形式による第一楽章、曲行いここに、ピアノ・ソナタ第3巻の巻に書かれているせいか、初期後半のキャラクター、そして技巧的な面では第3巻ソナタに似ている点もある。そして、この幻想曲の右頁に書かれているのが(文庫版第1巻 作品26/出版の都合上、作品番号が入れ替わった)である。様々な要素を取り入れた文庫版 第1巻での経験がこの幻想曲に全てを詰め込んだ。それは、初期編曲家としての経験を取り上げられる理由であらうか。

話がそれるが、同作曲家のピアノ独奏曲 作品20を是非一度は聴いてほしい。残念ながら日本では演奏される事は滅多にないが、とても美しい作品であることは疑いない事実である。

1つお好きな作品の1つだ。

【コンサート・プログラム】



C.ドビュッシー：喜びの島
C. Debussy L'Isle Joyeuse

一語に印象派(印象主義音楽)主義を代表する作曲家と
は言い難いが、ドビュッシー。

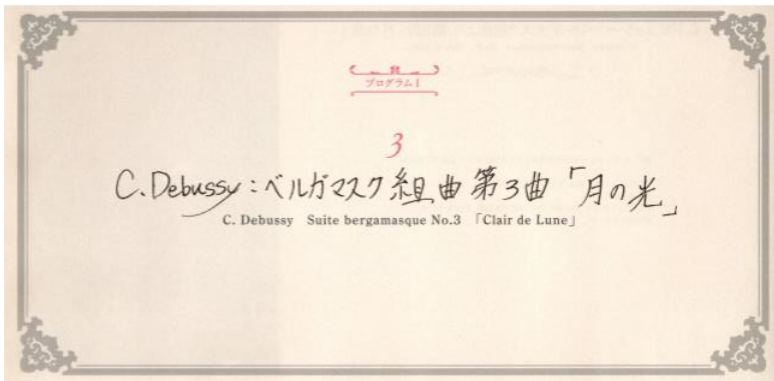
新たな一歩として印象派を開拓したのはドビュッシー本人
とも言われてるが、興味深いことに、ドビュッシー自身は
印象主義音楽という術語に対して否定的な見解を示したと
いう。

そんなドビュッシーは、上記から伺える様に神祕的で気難
しい性格の持ち主だったと言われており、人と関わるよりも
シャム殿を好み、いつも気付けば酒酌には耽っていた。

ドビュッシーで有名なのは女性の話、幾度となく駆け落ち
を繰り返し、最終的には半後の母親と結婚してしまい、その
駆け落ち前夜の夢中に作曲されたのが「喜びの島」。
数にしては珍しい「性的要素を取り入れた作品」となってお
り、色恋騒ぎである。

また、誤訳はあるが、グノーの作品「シテール島への延
見」からの影響を受けているとも言われている。
このシテール島は、神話では愛の女神ヴェーナスの島とさ
れており、この寓意の事柄から、内気なドビュッシーでは
あったとしても争奪であった事が伺える。

反動的なリズム、華やかな和声、そして自然の音階一
ロシア音楽に通じる所が頻りに見える。そんな作品を、楽しく
弾きたい。

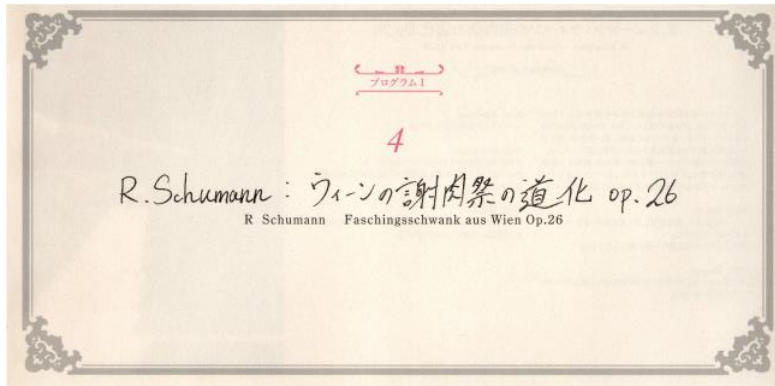
C.ドビュッシー：ベルガマスク組曲より 第3曲「月の光」
C. Debussy Suite Bergamasque No.3 「Clair de Lune」

詩人、P. ヴェルレーヌの作品を元にして作曲されたベルガマスク組曲。

「月の光」という題名は、クラシックに馴染みのない人でもきっと聞いたこ
とがあるはず。
シンプルな旋律で、目撃がない作品である故、響きや音楽を表現する
のはとても難しい。



【コンサート・プログラム】



R.シューマン：ウィーンの謝肉祭の道化 Op.26
R. Schumann Faschingschwank aus Wien Op. 26

シューマンが1838年の秋から半年間書き留めていたウィーンで17歳、童年期が行われており、その童年期からのインスピレーションを十二分に發揮し書いた作品、盛り上がった嬉遊、賑やかな舞臺みや人々を狂気に狂している。第3曲のうち4曲はウィーン童年期に書かれ、最後の一曲は軽快し書かれた。このスピードから、シューマンにとってウィーン童年期が最も経験、思い出しとなったかが見える。

第1曲 Allegro
パレードが始まり、音楽が遊ばれて狂を狂み、狂い狂っている音が浮かび上がる。
曲中にはフランス国歌の一部が挿入されている。

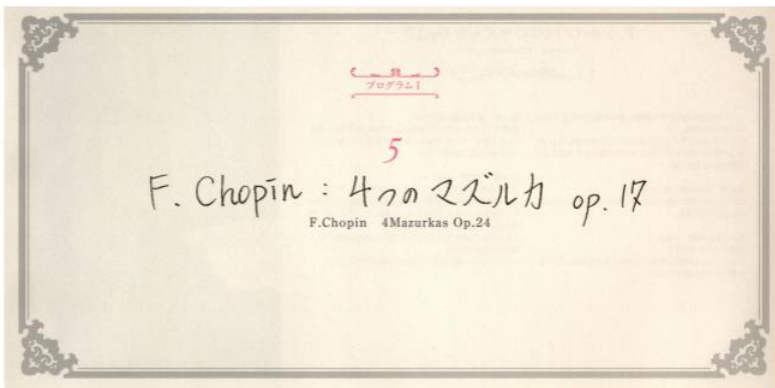
第2曲 Romanze
25小節という短い曲だが、その中で歌われる悲しみのメロディーが印象深く残る。

第3曲 Scherzino
ユーモラスで色彩に富んだ一曲

第4曲 Intermezzo
日本語では取組曲にあたる インテルメッツォ。野太く深いメロディの裏には繊細な一面があり、無言のうちに美しい。

第5曲 Finale
ソナタ形式によるフィナーレは、異教徒めやらめ音程が響かれ、最終曲に相応しい狂騒である。





F. ショパン：4つのマズルカ Op.17
F. Chopin 4Mazurkas Op. 17

パリから戻り帰国してから最初に書かれた作品で計4曲からなるマズルカ集。
作品17までのマズルカは民族音楽に基づき全曲に於いて、曲全体の色合いを出しているが、パリ滞在後からは内容がより洗練されることになる。

第10番 暁の哀調 作品17-1
ポロネーズに通じる勇壮さがあり、darexと書かれた中後部には驚かしがある。

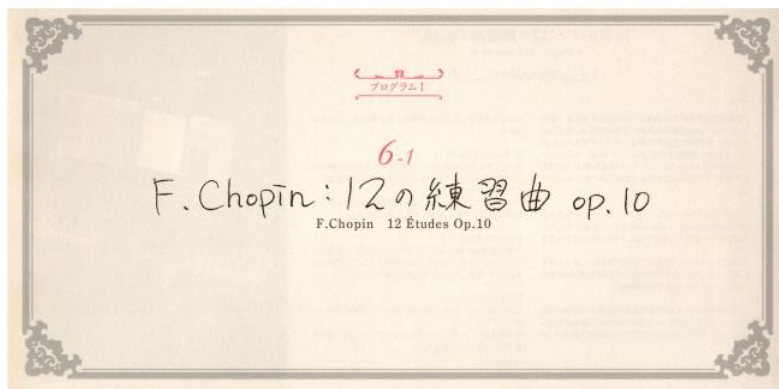
第11番 夜曲調 作品17-2
短調のクマール・グイヤク
短調によって中後部の演奏が14小節にわたって繰り返している。楽譜の中からの遊びなのか。

第12番 愛の哀調 作品17-3
優雅なシンコペーションを多用した作品、手軽に「そうではない」、ユーモア溢れる作品、中後部では上行していく行子が非常に印象的である。

第13番 イ知照 作品17-4
左手の独特な和声進行、どこか暫りの境地に行ってしまった右手の旋律、非常に印象的や、遠くから音が出て、聞きそで決めたい。必ずしも物があることはあって「そう」だった印象を思い浮かべず書かれた和声。しかし、その和音が響きとわくわくしているため、仕様が合っている、聞きそで聞いている。
これらショパンの楽譜でもあつたのではないだろうか？



【コンサート・プログラム】



F. ショパン: 12の練習曲 Op. 10
F. Chopin 12 Études Op. 10

1.

練習曲と名がついた作品は群の中で最も数えきれない程あるが、ショパンの練習曲は真珠の作品集である。練習曲はそもそも、基本的な技術や演奏態度を向上させるために書かれた楽曲の事を持つが、どうしても「芸術的駆け込み」という印象を与えがちだが、ショパンの練習曲集は、より音楽的な思考、工夫を凝らして考えなければ手に入れない。

ショパンはピアノに対してのイメージとして練習曲を作ったのだが、12という数は自らにとって最も重要な数字ではない。数字は、楽譜で目にするもの別々といえは…

「12練習」、12ヶ月、「12星座」、「方位」等があり、そして我々に欠かさないのが12平均律(十二平均律で音楽は基本的に成り立っており、全部で24の調性)。

今初集の作品10の練習曲では平均調(ハ長調)の練習曲、下調(ハ長調へハ長調への移調で最後まで成り立っており、各により作品の一つひとつの性格が際立ち、華やかさもあるが、今日では学習者の金字標となっている曲である。

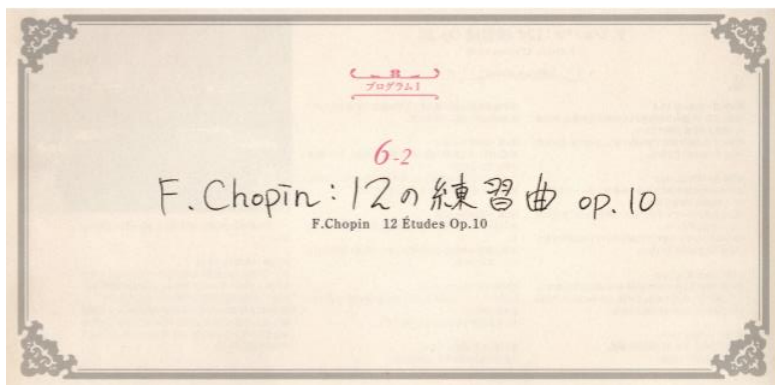
第1番 ハ長調 Op. 10-1
華やかとした左手の旋律の上に、4オクターブに及ぶ音域の交差を繰り返して演奏していく様は、まるで木々が揺れと対話をしている顔にも見えてくる。
ちなみに名ピアノスト、アルフレッド・コルトーは自身の楽譜に記載した到達目標に「威厳と静けさ」と記している。

第2番 イ短調 Op. 10-2
半音階を鍵盤に駆け回り、且つ和声の発音をしっかりと出さなければならぬ手には、多くのピアニストたちが涙を流るほどの難曲。これぞ練習曲の醍醐味、といった作品。

第3番 非長調 Op. 10-3
「調性の曲」としても有名な作品。前日すべし所は、モロコシ以外の声である。
列挙から出てくる音程の密度、音の置き換えによる音の連続、音色の温度が特徴の作品。

12. に続く





F. ショパン: 12の練習曲 Op. 10
F. Chopin 12 Études Op. 10

2.

第4番 嬰ハ短調 Op. 10-4
全曲とは違って変わりの楽譜は18小節から始まり、様々なリズムで演奏を繰り返している。
意外にも楽譜で初めて「舞の曲」であり、自身が必要から取り除いたものもあつてある。

第5番 嬰ハ短調 Op. 10-5
左手が民族音楽を思わせるか「加齢のエンターテインメント」と言われ、とても難曲な作品。
最後にはオクターブで下方へ進行で弾いていき、次の作品へ上手くつなげている。
意外にも楽譜で初めて「舞の曲」を弾いている箇所があるのは意外にも知られていない。

第6番 変イ長調 Op. 10-6
第3楽の練習曲と似た感じから始まるこの曲はとても難曲と、どこか暗い印象がある。その調、となるのが、左手の絶妙なリズム、左手が主の作品である。

第7番 ハ長調 Op. 10-7
第2部を強調して、(第1部)と同じ調性、和音の置換も変イハ長調。

第8番 嬰ハ短調 Op. 10-8
第4楽の練習曲18小節が絶えず、半音階が走り抜けていく難曲が響く作品。
左手のメロディがまた美しい、和声進行にはシンパブルに構成されており、和音の響きが印象的。

第9番 ハ短調 Op. 10-9
同調であるハ長調からのハ短調は足音を移り変わりである。
音楽の感情を認めるための作品、途中で暗さとも思われるフレーズが現れる。

第10番 変イ長調 Op. 10-10
6拍子リズムにした練習曲だが、和音の響きが響き渡ってくる難曲な作品だ。
変イ長調を繰り返して聴くものも増える。

第11番 変イ長調 Op. 10-11
アルペジオ、演奏のための練習曲。



子の手を前小節に減らすことで無難な曲を弾くことができ、演奏性が一気に低下される。

第12番 ハ短調 Op. 10-12
ロシア前からの難曲を演奏したポーランド、しかし革命が来ると、和音からシリアスな難曲としたこの難曲を受けたのは、ショパンが演奏会で難曲を弾いていた最中だった。
難曲的にも普通ではなかった当時の難曲が書いたこの練習曲は、他の作品よりも更に演奏の身体力や、内に向けた難曲性を持っている。作品になった。「華やかなエンターテインメント」では呼ばれている。